

CIFLE Report No. 19

英文法力を考える

田中茂範

(ココネ言語教育研究所)

はじめに

語彙知識と語彙力の関係は、そのまま文法知識と文法力の関係にも横滑りさせることができます。文法について知っていることと、文法力があるということは別物ということです。日常の言語活動は自由表現と定型表現によって構成されますが、定型表現が慣習的であるのに対して、その都度作り出される自由表現は創造的だといえます。そして、文法力が「自由表現」の要となってきます。Noam Chomsky (1957) が *Syntactic Structures* の中で述べたように、文法力とは「有限個のルールによって無限個の文を創り出す力」です。つまり、自在に文を編成する力が文法力ということです。

だとすると、英語力において文法力は決定的に重要です。このことは「文法のない言語は存在しない」ということから了解出来ると思います。どんな言語であれ、それを獲得して話すということは、同時にその文法力を獲得しているということの意味します。しかし、母語の場合、文法力は、知らず知らずのうちに自然に習得されるため、当該言語を話す人たちにとっては身体感覚のように自明化されています。それでも、文法力を備えているからこそ、言語が表現の共通メディアとして機能するのです。文法力があるからこそ、ある表現を聞いて、それが自然かどうかを判断することができるのです。

例えば、道をたずねる状況で、「慶應大学はどうやって行けばいいのですか」は自然な日本語ですが、「慶應大学がどうやって行けばいいのですか」と留学生がいえば、不自然な響きを感じられます。日本語を母語とする人であれば、この場合「が」は使わないということ直観的に知っているのです。しかし、どうして「が」ではだめなのかについて説明を求めても、言語の専門家でない限り、なかなかうまく説明はすることはできません。説明ができないということと、文法力を備えているというのは別の話です。

英語が日常的に使用されていない環境の中では、英文法力が無意識のうちに獲得されるということはありません。「英文法」を自覚的に学ぶことを通して、学習者自身が「英文法力」を構築していかなければならないのです。

私たちは、「英文法」と学習参考書や問題集があつて、それを学ぶのが文法の学習だと考えがちです。しかし、英文法の学習については、いくつかの問題が指摘されています。中でも、「英文法が分からないから、英語が分からなくなる」と、「英文法を学んでも英語が使えるようにはならない」という2つ問題です。

本稿では、従来の英文法を「学習英文法」と呼び、「分かる」と「使える」の条件を満たし、文法力を育てるのに有用な英文法を「表現英文法」と呼ぶことにします。まず、(1) 学習英文法の問題を踏まえて作成された文科省の指導要領では現在どういう文法観を示しているのかを概観し、次に(2) 表現英文法の構図を描き、そして最後に(3)文法力に繋げる学習方法としてネットワーク英文法の視点を紹介します。

学習指導要領のスタンス

「文法力が英語力の要である」と上述しましたが、これまで文法の役割をどう捉えるかは、英語教育の重要な争点の1つでありました。英語教育の現場では、文法中心かコミュニケーション中心かといった具合に、文法とコミュニケーションが2つの焦点として捉えられてきたということです。しかし、文科省による現行の学習指導要領では、文法とコミュニケーションを融合する立場が示されています。中学校の学習指導要領（外国語編）の場合、文法指導について3つのポイントが示されています。

- ①「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」
- ②「用語や用法の区別などの指導が中心にならないように配慮し、実際に活用できるように指導すること」「語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること」
- ③「英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるように工夫すること」（下線部は筆者）

学習指導要領では、第一に、「文法かコミュニケーションか」ではなく、「文法はコミュニケーションの基盤である」という見方が示されると同時に、文法は言語活動に関連づけるものでなければならないと指摘しています。第二に、文法の指導に際しては、「用語や用法の区別などの指導が中心にならないように配慮し、実際に活用できるように指導すること」が強調されると同時に「語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること」が明記され、ここでも「使える」ということが強調されると同時に、言語的な気づきを高める（*awareness-raising*）の工夫の必要性が示されています。そして、第三に、「英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるように工夫すること」が指摘されているように、文法項目を関連づけることの重要性が示唆されています。つまり、文法は体系であり、項目が相互に関連し合った時、本来の文法の姿が見えてくるということが示唆されているのです。

筆者は、ここで示された文法観は健全であり、文法知識を文法力に変換するやり方を考える上で、指針が示されていると考えます（なお、ここで基本的な考えは、学習指導要領（高等学校編）でも生きています）。

しかし、問題は、「文法」というコトバが指す対象が何であるか、にあります。学習指導要領では「工夫すること」という文言があるように、従来の英文法(指導)のあり方を再考することを促しています。本章では、文法力につながる文法とはどういうものかについて考えていきたいと思います。文法という体系を扱う以上、個別的な文法事項の説明に入るとはバランスを欠いた論展開になってしまう可能性があります。そこで、これまでの文法知識を再編成する際の構図のようなものを描くことをここでの狙いとしします。

英文法再編成のための考え方

どのようにして英文法の再編成を行えばよいのでしょうか。まず、それは学習者の視点を重視したものである必要があります。その際の妥当性の基準は以下の2つです。

学習可能性 (learnability) : 学習者にとって学習可能なものであること。

使用可能性 (usability) : 表現活動において使用可能であること。

つまり、学習者にとって「わかる」ということと、「実際に使える」ということの2つです。従来の「英文法」は、確かに **teachable** (指導可能) でした。英文法を教えることができることはプロとしての英語教師の資質のひとつであり、例えば「不定詞」を指導する際に、指導の内容、指導の流れといったものが(個人的な創意工夫はあるにせよ)英語教師の間で共有されてきたように思います。

しかし、学習可能性ということになると、疑問が出てきます。「英語はむずかしい」と感じ、英語に対して苦手意識を持つのは、文法がわからないということが大きな要因となっているからです。つまり、学習者からすれば、英文法が学習可能かといえば、それは疑問であるということになるでしょう。

もう1つの基準、使用可能性はどうでしょうか。「学習英文法は使えない」という意見がよく聞かれます。確かに「学習英文法は役に立つ」ということも少なくないはずですが。しかし、「英文法をやっても話せない」という見方は比較的広く浸透しているように思います。

使うための「分かる」という条件

学ぶ者にとって目指すべき英文法は、「わかる」ということと、「使える」ということとの条件を満たすような英文法ということになります。「わかる」ということは、学習の根本を成す感覚です。「わかる」は「分ける」ということと関連があり、差異化、差別化が行えるということです。混沌の中からある形を見いだす、これがわかるのイメージです。「わかる」

にはさまざまな次元がありますが、「なるほど、そうか、わかった」という感覚は学びの動機づけと結びついてきます。「わかる」からおもしろい、おもしろいからさらに学ぶ、という連鎖が「持続的動機づけ」を生み出すのです。

「わかる」ということは、「有意味学習 (meaningful learning)」の条件です。「既存の知識」との関連で「わかる」という感覚は得られるのであり、教育学者の David Ausubel (1968) がいうように「他との関連性 (relatability)」が鍵となります。「なるほど、そうか」から「そういえば、あれも」と連鎖していくこと、これが関連性ということなのです。

my English を構成する文法力

英語力は、文法を意識しないで自然に英語を使うことができる力です。はじめから無意識の内に文法直観が身体感覚のように身につくことは、英語が日常的に使われる環境でなければ考えにくいことです。自然に英語を学ぶ環境であれば、英語環境で英語にふれ、英語を使うという体験から文法力が自然に身に付くかもしれません。しかし、そうでない環境では、「自分の英文法」をひとつの体系として意識的に構築していく必要があります。その際に重要なのが、納得しながら英文法を構築することと、使うことを自覚しながら英文法を構築することの2つです。「分かる」と「使える」を実感しながら自分の英文法を自分で構築することです。しかし、『使える』を実感しながら」とはどういうことでしょうか。

「使える」という条件を満たすためには、基本語力を定義する際に用いた「使い分ける」と「使い切る」が鍵となります。「現在・完了形と過去形の違いは何か」「a と the の違いは何か」「不定詞と動名詞の違いは何か」などはすべて使い分けるために必要な問いです。一方、関係代名詞について知っていてもそれを有効に使えない、過去完了形の使い方がわからない、といった問題は「使い切る」に関するものです。ここでは「現在進行形」を事例として「使い切り」と「使い分ける」について見ておきます。

現在進行形の力

「現在進行形」の使い方として、眼前で何か動作が連続的に行われていれば、現在進行形を使って、**The girl is dancing in the rain.** のようにします。「これは (今まさに) ~している」という意味合いの現在進行形で、ほとんどの学習者が共有している典型的知識です。しかし、**The bus is stopping.** といえどどうでしょうか。これは「バスが止まりかけている」という意味です。これは、「すでに、ある動作が始まっており、それが終息に向かっていく」というのがこの現在進行形の用法です。**The balloon is falling on the ground.** (気球が地面に落ちようとしている) や **The population of wild tigers is dying out.** (トラの野生種は絶滅しつつある) も同様です。

さらに、**We are leaving for Hakata tomorrow.** と言えば「明日、博多に行くことになっている」ということで、「これから~を始めようとしている」という未来に向けた進行形で

す。

「今、まさに～している」「(すでに動作がはじまって)～しかかっている」「(これから)～しようとしている」の3つの使い方ができること、これが現在進行形を使い切るということです。進行形は連続体であるが故に、こうした3つの用法が可能となるのです。

さらに、**He lives in Kyoto.**と**He's living in Kyoto.**の比較は、現在進行形と現在単純形の使い分けに注目することになります。現在進行形においては「今は京都に住んでいる」ということで「一時性」が含意され、現在(単純)形では「現住所は京都だ」といった意味合いになります。また、**resemble**は通常、現在進行形では使いません。そこで「花子は母親に似ている」は**Hanako resembles her mother.**であって、**Hanako is resembling her mother.**とはいいません。しかし、**Hanako is resembling her mother gradually.**になると自然な表現になります。日本語では「花子はだんだん母親に似てきている」となり、「状態変化」が含意されるため進行形が可能となるのです。

このように、現在(単純)形と現在進行形の違いは使い分けの問題です。一方、「現在進行中」といっても、上で述べたように3つの側面に注目して現在進行形を使うことができるかどうか、また、一時性や状態変化の意味を読み取り、さまざまな状況で現在進行形を使うことができるかどうか、これらは使い切りの問題です。

表現英文法の特徴

従来の学習英文法も、絶えず研究成果が取り入れられ、英語の記述においては妥当性が高いものになっています。しかし、「会話力と文法は違う」という社会通念があるように、学習英文法を学ぶことが文法力になかなか繋がらないところが問題です。そこで、繰り返し述べているように、学習英文法の再編成が求められるのです。

再編成をする際の方向性は「わかる」と「使える」の条件を満たすことだと既に述べました。より具体的に、そういう条件を満たすような表現英文法を構築するには、「英文法の全体像を示すこと」と「表現者の視点を取り入れる」の2つがポイントである筆者は考えています。

ある言語事実に注目して、それを分析して構造や原理を明らかにするという研究スタイルが学習英文法の研究では主流であったように思います。例えば、「関係代名詞」であれば、その使われ方を資料として分析し、どういった傾向(言語事実)が引き出せるかといった問題に注目するということです。最近では膨大な言語使用テキストをデジタル化した**BNC (The British National Corpus)**や**COCA (The Corpus of Contemporary American English)**といった言語コーパスを利用して、頻度や比較や連語性などさまざまな観点から言語使用実態を研究することが可能となっています。コーパスを使った研究によって、英文法の記述的な研究はその信頼性を飛躍的に高めています。

しかし、個別の言語事実は詳らかになっても、学習英文法の全体像が見えなければ、文法項目は分散したままになってしまいます。これが「全体像」の問題です(この問題につ

いては後ほど取り扱います)。

表現者の視点

さらに、英文法の記述は、学習英文法としての働きを考慮した場合、文法それ自体を対象化して、分析し、記述していけばよいというものではありません。文法を学ぶ目的は文法力（自由表現のための文法）の獲得にあります。だとすれば、言語事象の記述・説明は表現者の視点から行うべきです。表現者の視点（見る視点と語る視点）が重要なのです。これまでの「学習英文法」では、例えば、関係代名詞、分詞構文、不定詞などについて扱うものの、それぞれが言語事象として語られ、そこに「表現者」が入ってくることはなかったように思います。（本稿では、表現者という言葉に「発話者」と「解釈者」を両方を含めて使います）。

表現者の視点を取り入れると、文法は、発話者がある状況をコトバへと事態構成し、また、解釈者がコトバから事態構成する際の「整序装置」のようなものだといえます。コトバへの事態構成が「表現」、そして、表現されたコトバからの事態構成が「理解」ということです。このことを以下では、翻訳行為を通して説明します。

翻訳における事態構成と文法

翻訳という行為は、言語Aを言語Bに変換する作業のことをいいます。しかし、翻訳において何を「変換=翻訳」するのでしょうか。日英語間での翻訳を例に考えてみましょう。日本語で表現されたコトバ（文字）を英語のコトバ(文字)に変換するのが翻訳であるという考え方もありますが、これは、記号変換を連想させるような機械翻訳の場合であれば、納得できるものでしょう。がしかし、人間が行う翻訳は、日本語で表現されたコトバを英語のコトバに変換するものではありません。むしろ、翻訳者が日本語で表現されたコトバから意味づけた意味（=事態）を英語空間の中で（英語というコトバを使って）再構成すること、これが翻訳という行為です。

すると、翻訳には、「解釈」と「表現」の2つの連鎖的行為が含まれる、ということになります。ある作者が日本語で書いた作品があり、それを英語に翻訳するという状況を想定してみましょう。作者は日本語で表現を紡ぎだすことで、作者の意味世界（事態）を構成します。そして、そこで構成した意味を、訳者は、今度は表現者として英語で表現することで英語テキスト（翻訳）の生成を行います

松尾芭蕉の「古池や、蛙飛び込む、水の音」という俳句の翻訳を例にとってみましょう。実際、この俳句の英訳は数多く存在します。代表的なものとして、Donald Keene と Lafcadio Hearn のものを取り上げます。翻訳者は、芭蕉の俳句を自ら解釈し事態を構成し、それを英語で表現することを通して英語版（翻訳）を作成します。Keene と Hearn の翻訳の違いを以下にまとめましょう。

古池や

The ancient pond (Keene)

Old pond (Hearn)

蛙飛び込む

A frog leaps in (Keene)

Frogs jumped in (Hearn)

水の音

The sound of water (Keene)

Sound of water (Hearn)

まず、「古池や」の部分に **The ancient pond** と **Old pond** の違いがあります。ここでは冠詞の選択と形容詞の選択の違いが明らかです。「蛙飛び込む」の部分は **a frog** と **frogs** の「数・冠詞」の選択の違い、**leaps in** と **jumped in** の時制と語彙選択に関する違いの2つに注目する必要があります。そして「水の音」でも **the sound of water** と **sound of water** の違いが見られます。**Hearn** は無冠詞で **old pond** を選ぶことにより、古池の個別性を捨象してしまい、名もなき文化的象徴としての池、あるいは静かな永遠なる時のようなものを表し、そこに **Frogs jumped in** と「複数の蛙が飛び込んだ」と過去時制を使うことで、個別具体的な事実が表現されている。静かなる時空に繁殖期にある蛙の生の躍動のようなものが放り込まれ、また、**sound of water** と無冠詞で表現することで、静かに永遠なる時に戻るといった様子を事態構成することができる。**Keene** の **the ancient pond** は「悠久の時を経た池」という意味合いになり、**old pond** ほど池の個別性が完全に消去されているわけではありません。また、**A frog leaps in** は「一匹の蛙がひょいっと飛び込む」という静止画的な描写が行われています。

ここで注目したいのは、文法（冠詞や時制）はまさに事態構成のためにあり、**Hearn** も **Keene** も文法を使って表現することを通して事態を構成しており、筆者の上の解釈も、文法事項に注目することで、英訳からの事態構成を行った結果ということになるということです。

このように、表現者（解釈者も含む）視点を取り入れると、文法は事態構成の仕方を整序する働きがあるということになります。つまり、事態構成のありようを常に意識した文法が表現英文法ということです。**He is living in Kyoto.** と **He lives in Kyoto.** の比較を上で行いましたが、まさに現在進行形か現在単純形かで事態は異なるということです。

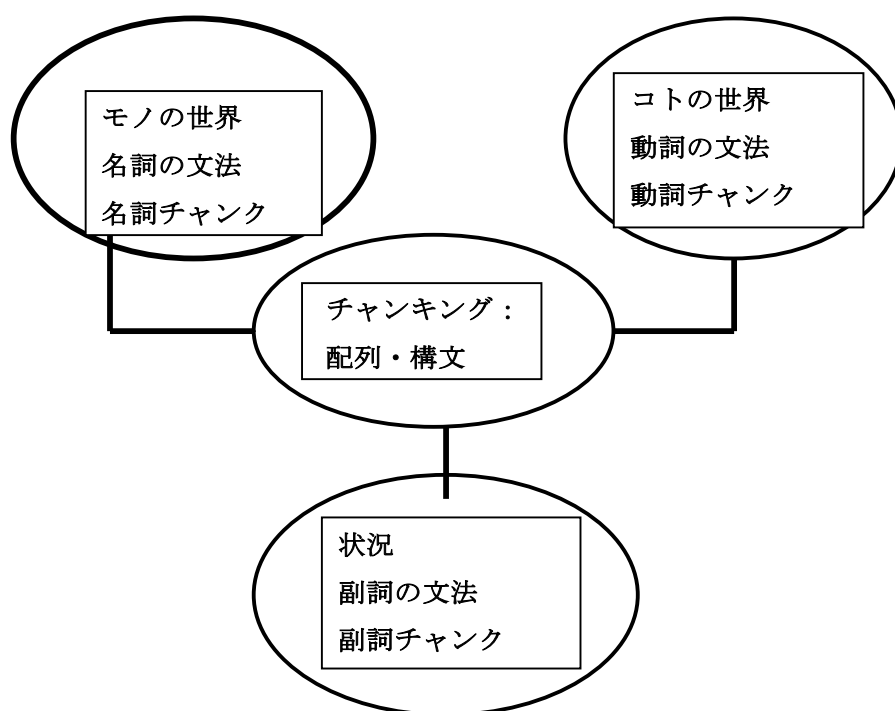
英文法の全体像：モノ・コト・状況

学習英文法から表現英文法に再構成するには、表現者が世界（外的世界と内的世界）について語るというスタンスを重視しつつ、ここでいう「世界」を語る道具立てとしての文

法のありようを考察しなければなりません。これは、表現英文法の全体像を描くということに接続します。

世界はモノ、コト、状況によって構成されることができる。まず、モノ (things) の世界というものを想定することが可能です。世界はモノ (具象的、抽象的なモノ) の集合であるという捉え方がそれです。しかし、現実には、モノ同士が関係しあい、ある状態、ある出来事が起こります。これはコト (events) としての世界です。コト的世界は、状態も含まれますが、典型的には動的です。そして、コトは状況 (circumstances) の中で起こります。ここでいう状況は WHEN、WHERE、HOW、WHY に関する情報を含み、さらには、現実状況に対して仮想状況なども含まれます。

文法的には、モノの世界は、名詞の文法によって表現され、コトの世界は動詞の文法によって表現されます。そして、状況を表現するのは副詞の文法です。名詞の文法が名詞の世界を表現するという場合、それは名詞チャンクを通して表現するということです。例えば「ブランコ」というモノについて英語で表現するには、a swing (ブランコ) だけでなく、an old swing (古いブランコ)、an old swing in the park (公園にある古いブランコ)、an old swim in the park which was repaired last week (先週修理された公園の古いブランコ) などの表現チャンク (表現のまとまり) が含まれます。これらはすべて名詞チャンクです。同様に、コトの世界を表現するには「動詞」の役割が不可欠であり、表現のための道具立てとして動詞の文法があります。状況は文法的には副詞の文法によって表現され、副詞の文法は副詞チャンクの形成にかかわります。全体像を示すと以下のようになります。



すると、表現英文法は名詞の文法、動詞の文法、副詞の文法の3つから構成されるということになります。これに加え、チャンキングを考慮する必要があります。すなわち、表現活動とはチャンクを連鎖して表現の流れを紡ぎ出すことであり、チャンキングは英語表現の編成の原理だといえます。

さて、ここで、学習英文法の再編成の具体例として、ここで示した全体像の中に文法項目がどう配置されるかを示してみます。

名詞の文法

- 名詞形 (an apple, apple, apples, the apple, the apples)
- 前置修飾 (限定詞+数量詞 (序数・基数+形容詞の順序+名詞))
- 後置修飾のシステム (前置詞句、形容詞句、to 不定詞句、関係詞節など)
- 代名詞・指示詞・数量詞 (it, they, this, that, some, a few など)
- 名詞化 (例. that 節、WH 節 (what to do, when I should do it など))

動詞の文法

- テンス・アスペクト・ヴォイス (現在進行形、現在完了進行形、受動態など)
- 態度表明型の助動詞 (modality) (can, may, will, would, should など)
- 動詞の共演情報 (V + α) (動詞+名詞+形容詞、動詞+名詞+名詞、動詞+名詞+do など)

副詞の文法

- 強弱濃淡のアクセント (very, somewhat, so など)
- 情報表示機能 (場所、時間、理由、目的、付帯状況など)
- 副詞の位置 (文頭、文中、文尾)

チャンキング：配列と構文

- 情報の配列 (語順)
- 接続と論理 (and, if, when, while など)
- 主語の種類 (生物主語、無生物主語、形式主語など)
- 文のタイプ (平叙文、疑問文、命令文、簡単文、省略文など)
- 慣用構文 (比較構文、否定構文、強調構文など)
- 話法 (直接話法、間接話法) .

上図で示したような全体像を示すと、英文法力とは、名詞的世界、動詞的世界、副詞的世界について、どういう英語でどれだけそれぞれの世界 (そしてひいては総合化された世

界)を語るができるか、ということになります。名詞的世界を語るのに、子どもは、最初は小さな文法からはじまり、もちろん、個人差はあるが、機能性の高い洗練された文法を身につけていきます。同じことが、動詞的世界、副詞的世界についてもいえます。名詞の文法であれ、動詞の文法であれ。文法力としてみれば、同心円状にその豊かさ(レパートリー)を発達的に増していく過程とみなすことができます。もちろん、世界はこれらの3つの世界を統合・融合したもので、それぞれが独立しているわけではありません。実際の表現活動は語句を配列することを通して行われます。それを上図の全体像の中で、チャンキング(配列と構文)を中心に据えています。

さて、表現英文法の全体像(新しい文法の再編成の枠組み)を示したわけですが、全体像をイメージすると、文法項目の位置づけがわかり、目標が見えてきます。名詞の文法、動詞の文法、副詞の文法という3つのドメインがある場合、それぞれについて同心円状にその機能性を発達的に高めていくという目標を設定することができるということです。例えば、動詞の文法には、テンス・アスペクトの調整、話し手の態度の表明、動詞の共演者の配列の3つがメインとして含まれますが、これらを含んだ小さな動詞の文法から、より大きな文法へと展開すること、これが同心円状あるいはスパイラル(らせん状)に文法力を身に付けるということです。また、例えば「関係代名詞」が学習項目だとした場合、全体像の中で名詞の文法の1つ(後置修飾のシステム1つ)として位置づけて学ぶことができます。そこで、本稿では、表現英文法の文法力を高めるためには、ネットワークングの視点が重要であるという提案を行います。

ネットワークングの視点

英文法の全体像は、モノ的世界を扱う「名詞の文法」、コト的世界を扱う「動詞の文法」、状況的世界を扱う「副詞の文法」、そして言語情報の配列を扱う「情報配列と構文」の4つのドメインを想定するものですが、それぞれのドメインを構成する道具立て(要素)を種々のネットワークとして整理していく必要があります。その際に、背景にある考え方は、英文法力を身につけるには **network-building** (ネットワーク構築) の視点が重要であるということです。バラバラの知識ではなく、意味的・機能的にまとまりをもったネットワークを意識的に構成することで、文法力は身に付くだろうという考え方です。以下でいくつか具体例をみておきます。

名詞の文法のネットワーク

例えば、名詞の文法の前置修飾であれば、以下のような文法ネットワークを作成することができます。

前置修飾ネットワーク

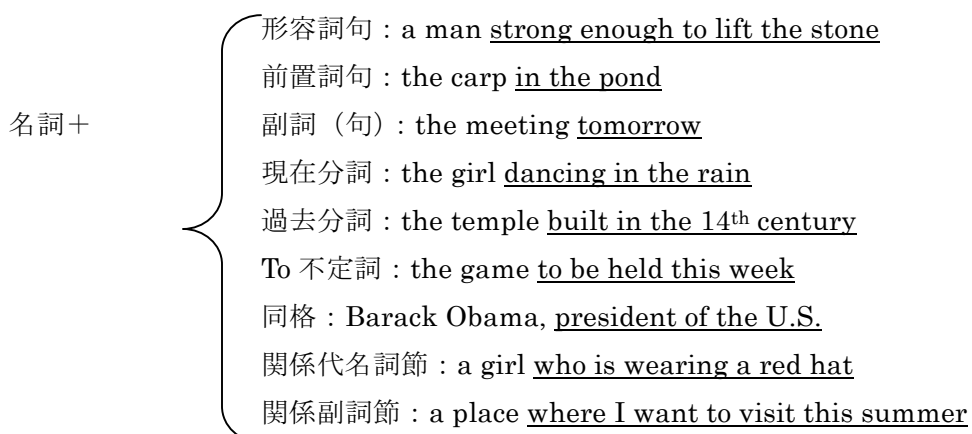


限定詞 : the, a(n), this, these, that, those, each, every, either, neither, no, a little, little, a few, few, some, several, much, many, a lot of, lots of, more, less, most, my, your, his, her, its, our, your, their, one's

名詞を前から修飾する方法には決まりがあり、それを配列のネットワークとして理解していくと名詞の文法力を高めるのに有効です。まず、配列の順序があります。強意語と限定詞は数が限られているため、その要素を押さえることができます。問題は、形容詞の部分ですが、形容詞として機能する表現（過去分詞や現在分詞など）と形容詞の配列の傾向性を押さえておけば、前置修飾のネットワークは整理することができます。形容詞の配列傾向は「主観的（評価・意見）→客観的（知覚的）→属性・用途→名詞」のように記述することができます。後置修飾のネットワークも示せば、以下のようになります。

後置修飾ネットワーク

名詞の後ろから情報を加える

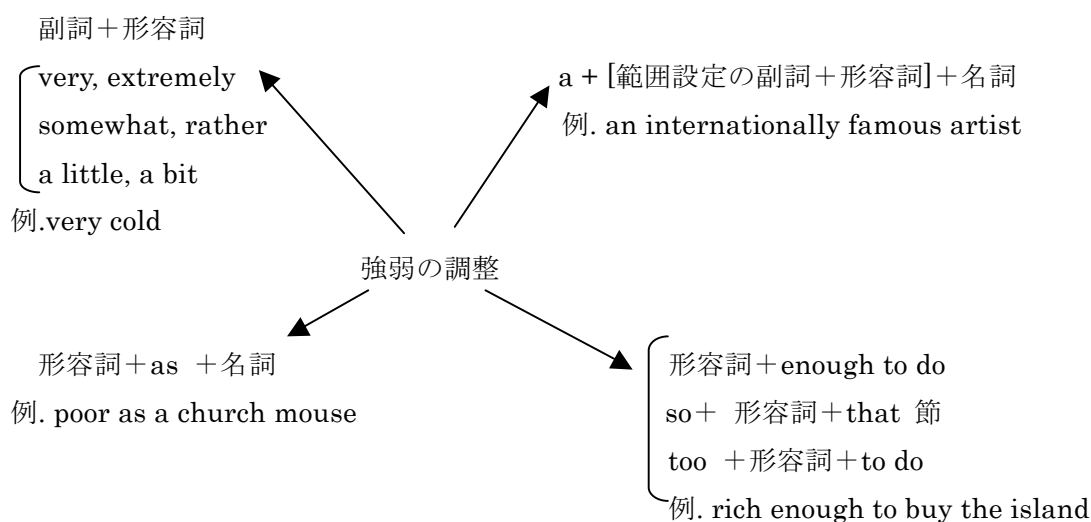


名詞の後ろから情報を加えるということにおいては共通していますが、ここでリストした表現方法は、私たちによって選択可能なレパートリーと考えることができます。「雨の中で踊っている少女を見てごらん」という内容を表現するには、**Take a look at the girl dancing in the rain.** を選ぶでしょう。もちろん、**Take a look at the girl who is dancing in the rain.** のように、関係代名詞節で表現すること可能だし、**Take a look at the girl in the rain. She is dancing.** のように、前置詞句で **the girl** を後置修飾しておいて、改めて文情報を足すという方法もあるでしょう。いずれにせよ、後置修飾のネットワークがあれば、豊かに情報追加をすることができるということです。

副詞の文法のネットワーク

ここでは副詞の文法のネットワークも2つ例として取り上げます。以下を見てみましょう。

強弱調整表現ネットワーク



副詞の働きの1つは形容詞に強弱濃淡のアクセントをつけるというものです。その基本となるのは「副詞+形容詞」ですが、形容詞の強度を調整するだけでなく、写実的に強弱濃淡のアクセントをつける方法が英語にはあります。例えば、**too ...to** は熟語として扱われますが、写実的に形容詞のありようを調整する構文としてとらえることで、英文法の中のそのはたらきと位置付けがはっきりしてくるはずです。

ネットワークとして文法を整理するということは、ある表現を行う際のレパートリーを自覚的に広げていくということです。その中から、ある表現を「選択」することができること、これが文法の力です。例えば、副詞の文法には情報表示機能があり、その中に「様態を表す」が含まれます。

様態のネットワーク

「様態 (manners)」は「物のあり方や行為のありよう」を表す表現で、英語では広義には how (どのように) にあたります。

これも語と句の両方で表現されます。語で様態を表す表現の大半は、beautifully のように -ly がつく語です。一方、句の場合には、in a (strict / professional) manner / fashion、あるいは in a way that attracts my attention、(in) the way we used to do の形が一般的に使われます。beautifully で「美しく」ということですが、in a beautiful manner あるいは in a beautiful fashion で表現することもできます。manner や fashion をつけ加えると、様態の意味合いが強くなります。efficiently でも同じで、in an efficient manner と表現できます。様態表現のネットワークという観点から整理すると次のようになります。

- ① beautifully 美しく、elegantly 優雅に、gradually 次第に、rapidly 急速に、slowly ゆっくりと、strictly 厳しく
- ② in a[n] [efficient / elegant / gradual / slow / strict...] manner 〈効果的な / 優雅な / 緩やかな / ゆっくりとした / 厳しい〉方法 / で
- ③ in a way that [reminds me of my teacher / attracts my attention]
(先生を思い出させる) 方法で、(私の興味をひく) やり方で
- ④ in such a way as to [help students learn vocabulary]
(学生たちがボキャブラリを学ぶのを手助け) するような方法で
- ⑤ (in) the way [I like / we used to do] (私の好きな) やり方で、(私たちが以前やっていた) 方法で

ここでは5つの選択肢が与えられていますが、こうした選択肢を持つことで、豊かな表現に繋がっていきます。これが文法力というものです。以下は、Scott Fitzgerald の小説 “The Great Gatsby” からの引用ですが、様態を表現する仕方に注目してみてください。

・ The officer looked at Daisy while she was speaking, in a way that every young girl wants to be looked at sometime.

その将校はデイジーが話している間、彼女を見つめた。それは、若い女性であれば誰でもいつかは見つめられたいような見つめ方であった。

・ “I’m going to fix everything just the way it was before,” he said, nodding determinedly.

「以前とちょうど同じようにすべてを整えるつもりだ」と彼は確信してうなずきながらいった。

ここでは、様態表現の内、3つが使われています。「若い女性であれば誰でもいつかは見つめられたいような見つめ方」といった写実的な様態の表現には **in a way that** 節は欠かせません。

おわりに

学習英文法を表現英文法に変えていくにはどうすればよいか。これが本稿でのテーマでした。英文法の全体像を示すこと、そして全体像を構成する文法項目のネットワークを作成する。この2つが表現英文法にする鍵である、というのが筆者の考えです。本稿で繰り返し述べているように、文法力を自覚的に磨くということが文法学習です。そうすることで、タスクを英語でこなすための言語リソースになるのだといえます。